

共生日本語教育実習生は 内省レポートをどのように体験しているか？ —構造構成主義をメタ理論とした修正版グラウンデッド セオリー・アプローチによるモデル化—

村中雅子・寺下裕久美・陳明淑・遠藤宏子・持田ひろ子・田川麻央・蘇位静・西條剛央

1. はじめに

都内の国立大学大学院では、2000年から毎年、8日間の共生日本語教育実習を行っている。この共生日本語教育実習は、教師成長型の教員養成を目的としており、実習生一人ひとりが「いつ、なぜ、そうするのか」を考え、自分なりの答えを見つけていくことを追及し、日本語教師の専門性を自分に固有の形で形成することを目指すものである（岡崎・岡崎1997）。そこでは、共生日本語教育を目標とする教育実習時に実習生に内省レポートを書くことを課してきた。この内省レポートは、Wallace(1991)によって教師教育のモデルとして提示された「内省モデル」に基づいたものである。（図1）

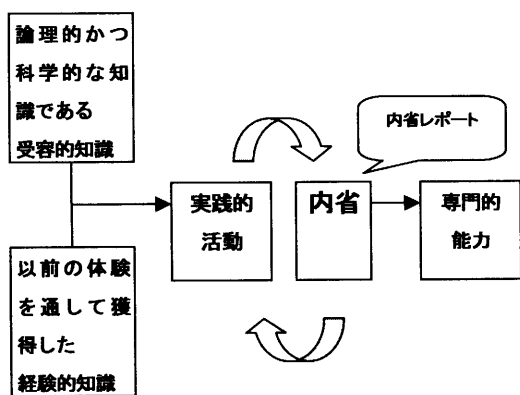


図1 Wallace(1991)の内省モデルにおける内省レポートの位置づけ

Wallaceのモデルでは、自らの体験を通して獲得した経験的知識と、受容的知識である理論的かつ科学的な知識を区別し、一人ひとりの教師が実践的な活動と内省を繰り返すことによって、専門的な能力を形成していくとするものである。

前述の大学院で行われている教育実習では、準備期間に実習生が自らの「内省」をレポートし、毎週1回課題として指導教官に提出している。内省レポートは、指導教官、実習生同士、共生日本語教育実習について研究する研究者が閲覧することができる。

そして従来は、この内省レポートシステムを先験的に是とした上で、内省レポートの記述内容に焦点化した研究が行われてきた（池田他、2006；野々口、2002；清水他、2006）が、実習生が内省レポートをどのように体験し、位置づけているかを根本的に問い直す研究は行われてこなかった。しかし、内省レポートシステムをその目的に照らしてより機能的なものにするためには、肯定的側面のみならず、中立的、否定的な見解をもつ人の率直な考えを丁寧に聞いていく必要がある。

2. 目的

本研究は、内省レポートについて肯定的・中立的・否定的な見解をもっていると考えられる事例を通して、実習生が内省レポートをどのように位置づけ、体験していたのか、そのモデルを生成することを目的とする。またそれを通じてより機能的な内省レポートとするための改善点を考える。

3. 方法

・対象者

都内国立大学大学院の日本語教育コースで行われた必修科目の共生日本語教育実習に過去数年以内に参加していた実習生3名を分析の対象とした。理論的サンプリングの根拠として、内省レポートを肯定・否定のバランスよく捉えるために、共生日本語教育実習報告書から、実習に対して肯定的・中立的・否定的な意見を持っていると筆者らが推測し、

総意が得られた実習生をそれぞれ1名ずつ関心相関的に抽出した。

・データ収集方法

面接は研究内容を説明し、十分なインフォームドコンセントを得た上で行われた。2006年6月に半構造化面接をインタビュアー2名と研究対象者1名で行った。面接は1時間ほどで、面接内容は研究対象者の理解を得てICレコーダに録音した。

・分析枠組み

データの分析は、木下(2003)の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下M-GTAとする)を用いた。本研究の研究方法としてM-GTAを選択した理由は、仮説生成を目的としたためモデル構築に適切であると考えたからである。

ただし、M-GTAには具体例(ヴァリエーション)が少ない概念は採用しないといったように、本研究のような少数事例に基づく研究に適していない側面がある。しかし、木下(2003, 2005)はユーザーが適時修正しながら活用していくことを勧めている。そしてそうした主張を理論的に基礎づけるメタ理論として構造構成主義がある。

構造構成主義においては事例数や具体例の数がどれだけ必要かは、研究者の関心(研究目的)と相関的に決まると考える。本研究の目的は、これまで焦点化されてこなかった内省レポートを巡る多様な経験をモデル化することにあるため、一人から生成された概念についてもこの目的と照らして重要と考えられるものは採用していくことが可能となる。したがって本研究では構造構成主義(西條, 2005)をメタ理論とし、その中でM-GTAを1つの方法枠組みとして使用することによって、M-GTAのエッセンスを活かしつつ少数事例に基づく研究を進める。

4. 分析の手続き

まず録音データを文字起こしし、トランスクリプトを作成した。その後、トランスクリプトの分析テーマに関連する箇所に着目し、それが実習生にとって何を意味するのか解釈し、概念名を与えた。そして類似の部分具体例(ヴァリエーション)とする概念を生成した。その際、解釈の恣意性を防ぐため、類似例、対極例があるかを確認しつつ、概念名

とその定義、具体例を分析ワークシートにまとめた。分析ワークシートとは、概念名、定義、具体例、対極例や分析の視点を書き留める理論的メモからなるもので、1概念につき1ワークシートの形式で作成した。

以下に生成した概念の一例を示す。トランスクリプトをみていくと「なんか自分の中の深い葛藤までは書けなかったり…」「大切にというか考えたいこととか(略)出さないこともある」「ご飯を食べながらの会話っていうのが、本音だと思うから、それが反映されていないだろうって思うから」「縦の嫌な葛藤みたいなものがあつたけど、書いている人はいないんじゃないかな」といったものが散見されたため、これらは内省レポートにはなかなか本心が書けないということを述べていると解釈し、「本心を書かない」という概念を作成した。またそれを“深い葛藤や素朴な実感、人を傷つけることは書かないこと”と定義した。

次に分析ワークシートに照らしつつ、概念と概念の関わりを検討しながらグループ化し、カテゴリーを生成していった。このようにしてM-GTAの分析手順に従ってボトムアップ的に構築したモデルが、次の頁に示した図2である。

5. 結果と考察

以下図2のストーリーラインを説明しつつ、考察を進める(下線は概念、<>はカテゴリーを意味する)。「定期的な提出義務」と「閲覧可能」といった二つの性質が実習参加者にとって内省レポートシステムの基軸に位置づけられていることが浮き彫りとなった。「定期的な提出義務」という性質から、実習生は自己理解の促進やもやもやの解消といった<書くことの効用>を感じている反面、強制感やこなすために適当に書くなどの<違和感>を感じていることもわかった。

一方、「閲覧可能」という性質からは仲間のことを知るや新たな視点の獲得といった<読む・読まれるメリット>を感じている反面、本心を書かないやどこまで書くべきか葛藤といった<見えない縛り>を感じていることもわかった。

また実習生が<違和感>や<見えない縛り>を

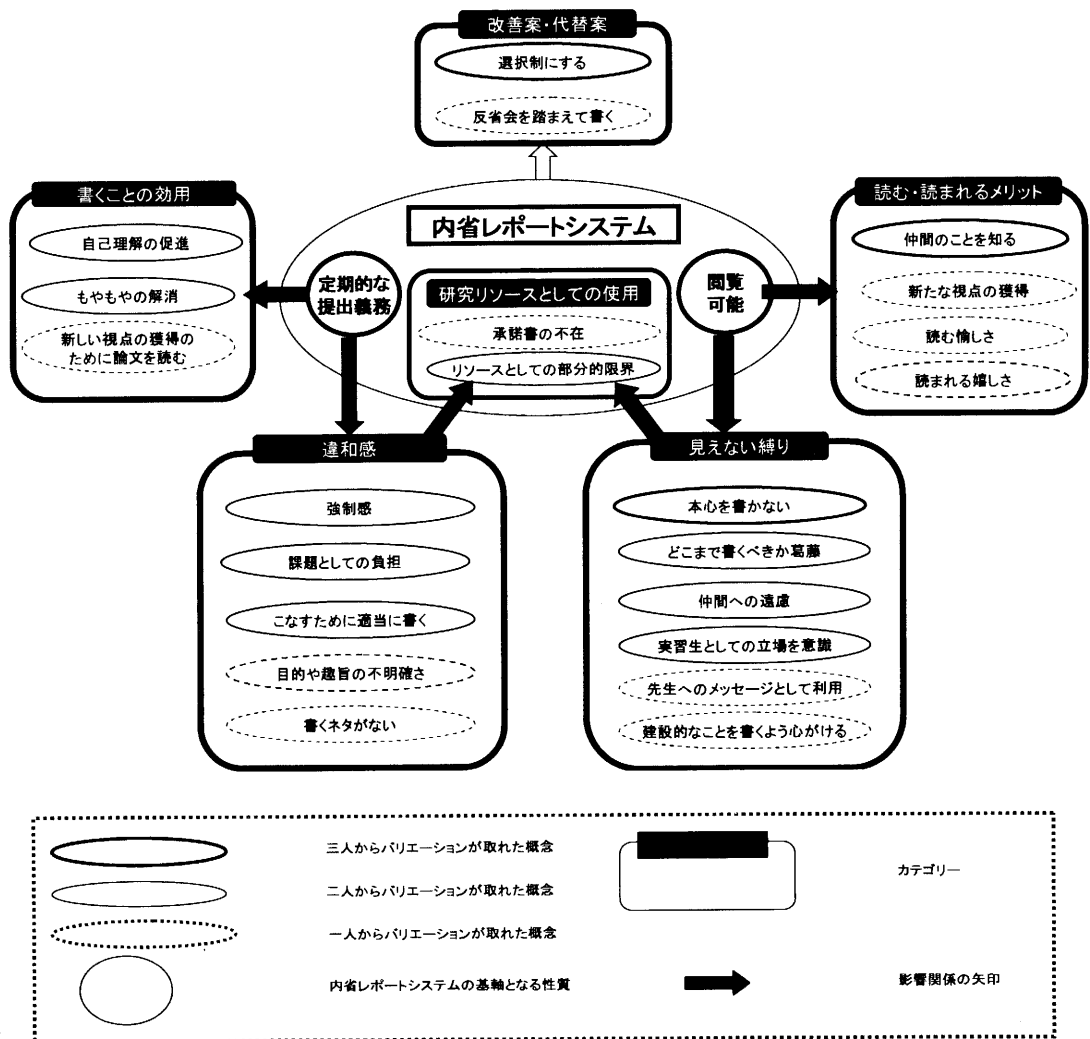


図2 実習体験者から得られた内省レポート観

感じていることから、内省レポートの<研究のリソースとしての使用>については、リソースとしての部分的限界を感じていることも明らかになった。

さらに現行の内省レポートシステムに対して執筆ペース、提出、閲覧許可範囲などを選択性にするなど<改善案・代替案>についての示唆もあげられている。以上のように、実習生にとって現行の内省レポートシステムは、これまでの研究が示してきたような肯定的な側面をもつ一方、違和感も覚えていることが明らかになった。内省レポートとは「内省モデル」型の教師育成サイクルの中で、その要である「内省」を促進させるために取

り入れられていると考えられる。その本来の目的を機能させるには、実習生の違和感を取り除いた形で実現されることが望ましいと言えよう。

そのための一つの可能性としては、実習生自身から出された改善案や代替案を内省レポートシステムに取り入れていくことが考えられる。実習生各個人は自分独自の内省スタイルを持っていると推察できるが、現行の内省レポートシステムで感じている違和感は、自分独自の内省スタイルと現行の内省レポートシステムとの間のギャップから生じている可能性もある。したがって実習生が自分の内省スタイルにフィットする内省レポートシステムをある程度選択できるようになれば、違和感

が解消され、本来の目的にかなった内省レポートシステムが実現可能になると考えられる。

具体的な例としては、①執筆開始時のインフォームドコンセントを徹底する、②日本語非母語話者は母語で書く、③提出頻度と回数設定をある程度柔軟に選択できるようにする、④閲覧可能な範囲を自分で設定するといったことが考えられよう。

こうした内省レポートをより機能的なものとするための建設的提案は、内省レポートについて肯定的な実習生のみならず、中立的・否定的な見解をもつ実習生がどのように内省レポートを体験しているかを丁寧に聞いていくことで得られたものと言えよう。

ただし、本研究で生成されたモデルの射程について言及しておく、このモデルは「定期的な提出義務」と「閲覧可能」という2つの性質を備えた内省レポートシステムの体験者から得られたものである。よってこのモデルを視点として活用する場合には、こうしたことを念頭に置いておく必要がある。

また、今後の課題としては、実習生が閲覧可能な中で内省レポートを執筆する際に「く見えない縛り」を感じるかは個人の自己開示性の程度に左右されると推察されたことから、自己開示性の低い

実習生が、内省レポートの活動を通してどのように自己開示に向き合うかといったことを明らかにすることなど考えられる。

引用文献

- 岡崎敏雄・岡崎眸(1997)『日本語教育の実習 - 理論と実践 - 』アルク
- 池田広子・バヤルマ、ナイダン・劉娜 (2006)「協働型実習の準備期間における教師の成長 - 協働活動による社会面の意識変容」『多言語多文化社会を切り開く日本語教育と教員養成に関する研究』お茶の水女子大学
- 木下康仁(2003)『グランデッド・セオリー・アプローチの実践』弘文堂
- 西條剛央(2005)『構造構成主義とは何か - 次世代人間科学の原理 - 』北大路書房
- 清水寿子・岡村郁子・古市由美子(2006)「共生日本語教育実習で実習生は何を経験するのか - 内省レポートのテキスト分析にもとづいて - 」『多言語多文化社会を切り開く日本語教育と教員養成に関する研究』お茶の水女子大学
- 野々口ちとせ(2002)「非母語話者実習生の自己受容 - 内省モデルに基づく教育実習の場合 - 」『内省モデルに基づく日本語教育実習理論の構築』お茶の水女子大学
- Wallace, J.M. (1991) *Training Foreign Language Teacher - A reflective approach*, Cambridge University Press

むらなか まさこ／お茶の水女子大学大学院 日本語教育コース
salutmasako@aol.com

てらした ゆくみ／お茶の水女子大学大学院 日本語教育コース
yujiumei@hotmail.co.jp

ちん めいしゆく／お茶の水女子大学大学院 日本語教育コース
chenmsjp@yahoo.co.jp

えんどう ひろこ／お茶の水女子大学大学院 日本語教育コース
hiroendo@f8.dion.ne.jp

もちだ ひろこ／お茶の水女子大学大学院 日本語教育コース
pochi219@yahoo.co.jp

たがわ まお／お茶の水女子大学大学院 日本語教育コース
maokobemao@hotmail.com

す うえいちん／お茶の水女子大学大学院 日本語教育コース
weiching420jp@yahoo.co.jp

さいじょう たけお／日本学術振興会
saijo@akane.waseda.jp